

平城京左京一条二坊十六坪、 木取山古墳の調査

—第568次

1 はじめに

本調査は、個人住宅建設にともなう事前調査である。建設予定地は、左京一条二坊十六坪にあたり、木取山古墳の周濠想定位置にもあたる(図279)。そのため、想定される周濠に直交する形で南北16m、東西2mの調査区を設けた。調査面積は32㎡。調査期間は、2016年4月6日から4月12日までである。

2 基本層序

現地表から造成土、旧耕作土、床土、暗褐色粘質土(古代以降の整地土と考えられる)、黄灰色礫混砂質土(地山)と続く。遺構はいずれも暗褐色粘質土下位の地山上面で検出した。現地表から検出面までの深さは約1.3mである。地山の標高は北では約69.8m、南では約69.6mで、北から南に向かって緩やかに標高を下げる。

3 検出遺構

検出遺構は、南北溝とそれに接続する支溝それぞれ1

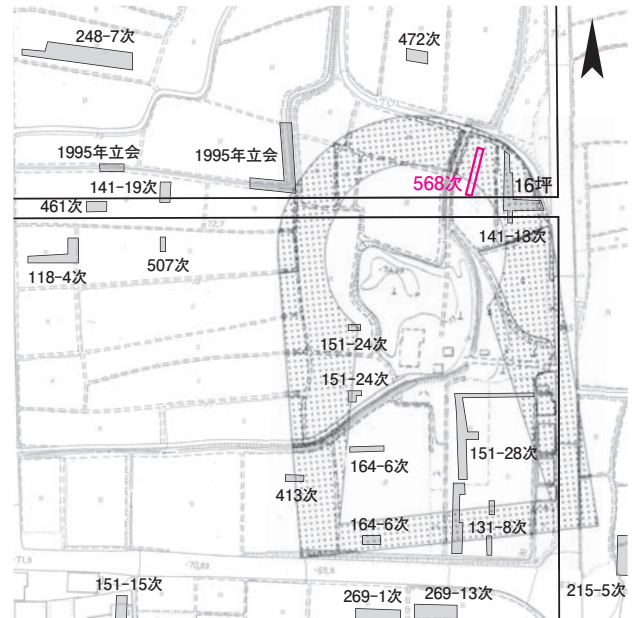


図279 第568次調査区位置図 1 : 2500

条と土坑1基である(図280・281)。想定していた古墳の周濠は認められなかった。以下個別に記述する。

南北溝SD11106 長さ7m以上、幅約60cm、深さ30~40cmで南流する。埋土は上層が褐色砂で、下層は小礫混じりの粗砂である。条坊方位に沿う。南方では西に弧状に取り付くとみられる支溝を検出した。奈良時代後半の

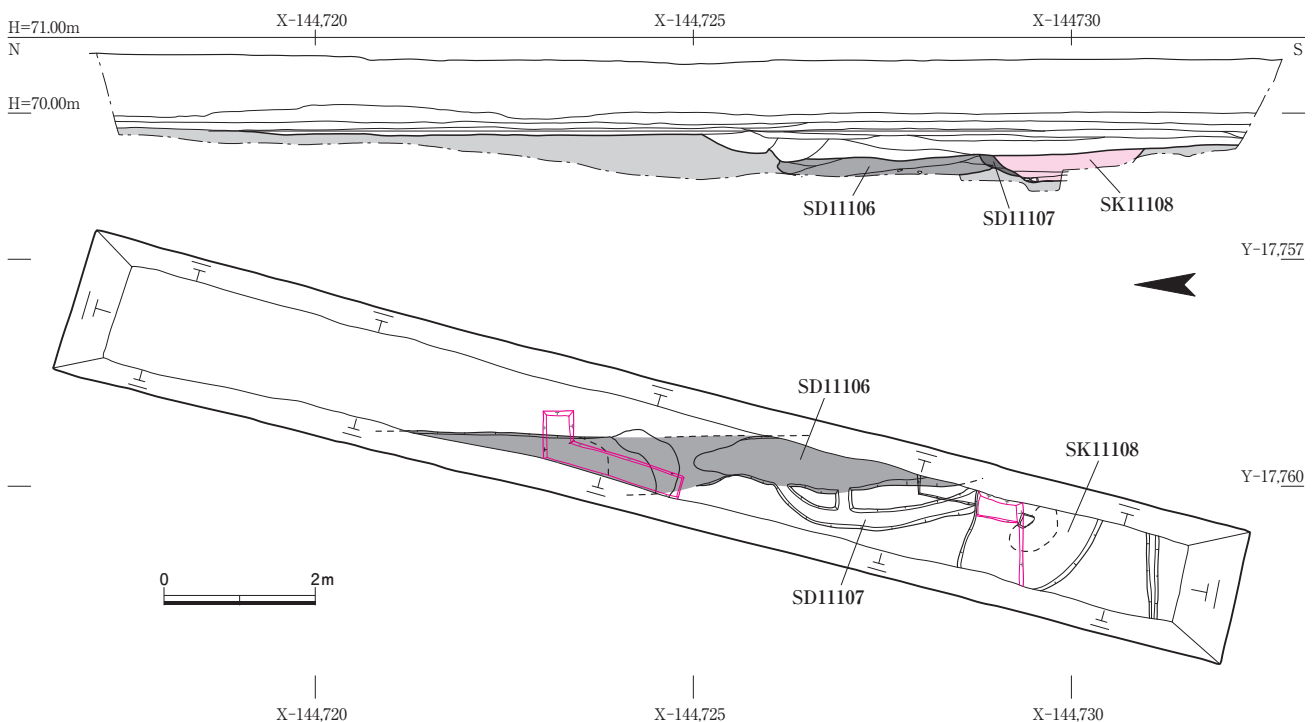


図280 第568次調査区遺構図・東壁土層図 1 : 100



図281 遺構検出状況（北から）

土師器、須恵器、瓦片が出土した。

南北支溝SD11107 南北溝SD11106に取り付く弧状の溝。長さ約4m、幅約25cmで、深さ約30cm。埋土は南北溝SD11106に類似する。土坑SK11108と重複し、これより古い。

土坑SK11108 南北約1.2m、東西1.3m以上、径1.5m以上、深さ約35cmの不整形円の土坑。東西端は調査区外に延びる。埋土には木炭片を多く含む。土師器、須恵器、瓦、磚等が出土した。南北溝SD11106、南北支溝SD11107よりも新しい。
(芝康次郎)

4 出土遺物

調査区から整理用コンテナ1箱分の土器・土製品および同コンテナ4箱分の丸瓦・平瓦片が出土した。以下、土器のみ記述する。

土器 奈良時代の須恵器・土師器を中心とする。図282の1～3は土坑SK11108出土。須恵器杯A（1）は焼成が軟質で、底部外面はヘラ切りの後、軽くナデ調整を施す。杯B蓋（2）は口縁端部を屈曲させる形態である。土師器碗A（3）は外面にヘラケズリを施した後、分割ヘラミガキを施す。4は南北溝SD11106出土の土師器杯

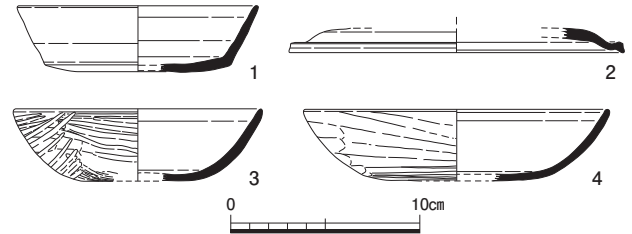


図282 第568次調査出土土器 1：4

A。内面に暗文はみられず、外面をc手法で調整する。これらの土器は奈良時代後半の特徴を示す。（小田裕樹）

5 まとめ

検出遺構は、条坊方位に沿う南北溝とそれに接続する支溝、そして土坑である。出土遺物から、これらはすべて奈良時代後半以降に埋没した遺構である。検出が想定された木取山古墳の周濠は認められず、また古墳に関連する埴輪等の遺物も全く出土しなかった。

過去の木取山古墳推定地での調査では、古墳の南端（前方部）で幅12m、深さ1mの葺石の残存する周濠が検出されており、埋土からは円筒埴輪、蓋形埴輪片が出土している（第131-8次調査、『1981 平城概報』）。また前方部東方の調査でも、幅10mの南北溝を検出しており（第151-28次調査、『1983 平城概報』）、前方部西方でも周濠肩とみられる落ち込みを確認している（第413次調査、『紀要 2007』）。しかし、今回の調査区の東方でおこなわれた調査では、奈良時代の東西溝や土坑状の落ち込みが検出されているのみで、古墳に関連する遺構や遺物は確認されていない（第141-13次調査、『1982 平城概報』）。

これらのことと今回の成果をあわせ考えると、木取山古墳の南方（前方部）では周濠が存在するが、北方（後円部）では、周濠が古代以降に削平を受けて消失しているか、そもそも全周しない可能性がある。今後周辺の調査をおこなう際には、これらを念頭に置いておく必要がある。
(芝)